

In evolutionary terms
the artificial
environment is a
sudden new threat to
survival. What do the
senses make of it
and what is a place
any more.

IFI '97 Ireland

テーマ「A Sense of Place」

IFI '97 アイルランド総会報告

IFI 理事 中川 帛子

去る9月23日、24日、ダブリンで開催された第18回 IFI総会には、タイとウルガイを除く会員の代表78余名が出席した。

会議に先立ち、他団体からのメッセージと共に、前回の開催都市である名古屋市長からのメッセージを披露、会場の拍手を得た。引き続き、事業報告、予算の承認、懸案事項の検討及び承認がなされた。

主な承認事項は、下記の通りである。

- ①次期理事長承認：デス・ロブシャー(南ア)
- ②新理事選出：H. クレー(仏)、C. ザボー(ブラジル)、Y. ミン(韓国)、C. リン(台湾)

名古屋総会で承認された地域理事制度が、変則的ながらスタートした。北米を除く全地域から立候補者があり、アジアからも2名の理事が選ばれた。

- ③新入会員の承認：正会員2団体

●IDA (シンガポール) ●AMIDE (ブラジル)

また、賛助会員として南ア及びシンガポールから、大学と職能団体が2団体ずつ加盟、両国のIFIへ関心の高さを示し、注目された。

- ④理事会提案事項の承認

●IFI 共催事業実施推進計画：同事業実施にあたって

JID NEWS

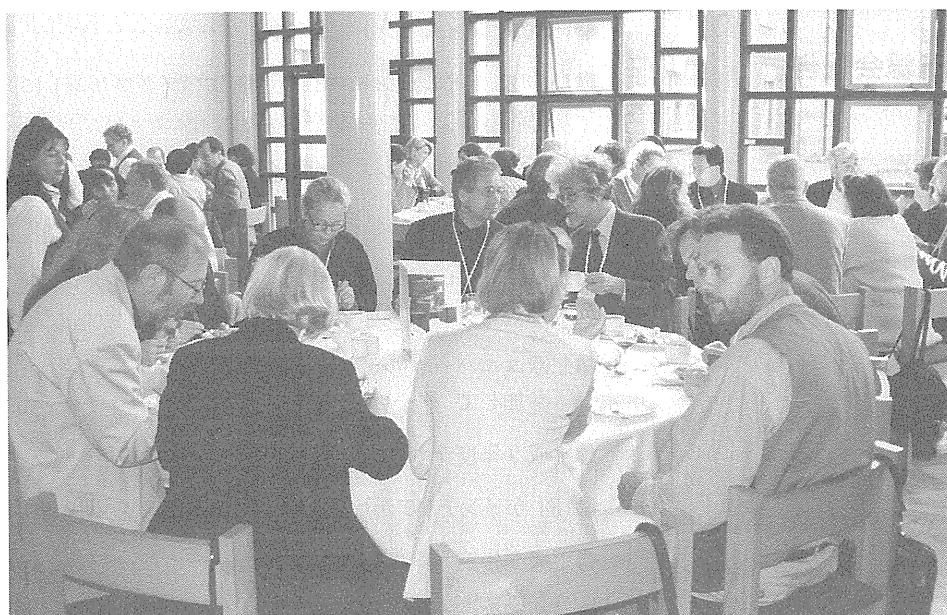
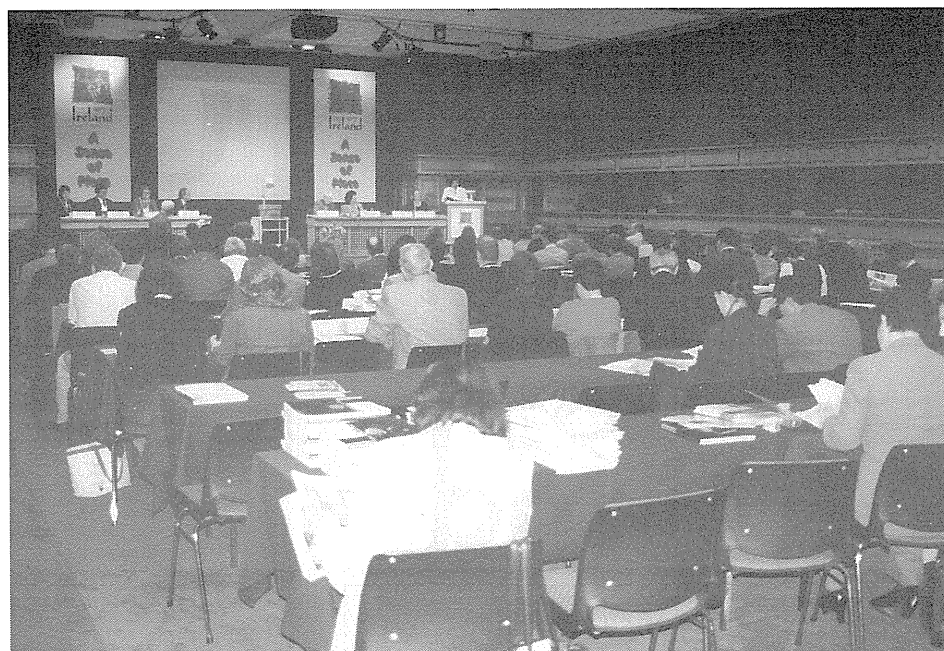
社団法人 日本インテリアデザイナー協会月報

1997 10・11

「目 次」

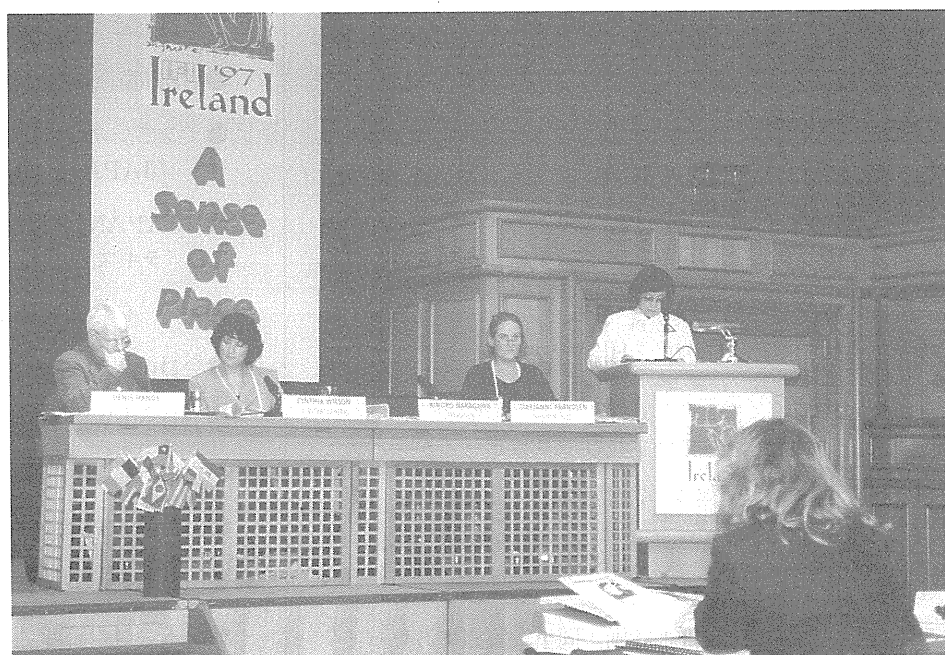
- IFI '97 アイルランド総会報告 1
- IFI '97 アイルランド 第18回 IFI総会(ダブリン)に出席して 3
- IFI '97 アイルランド 教育会議と基調講演 3
- Identity と Place の旅 4
- IFI '97 アイルランド大会と北欧ユニバーサルデザイン視察ツアーに参加して 6
- 北欧ユニバーサルデザイン視察ツアーに参加して 7
- 平成9年度デザイン功労者表彰を受賞して 8
- IFI がインテリアデザイン誌「FRAME」を発刊 8
- 平成9年度・第3回理事会報告 9
- 「全国のデザイン事業所による事業共同組合」設立について 11
- 活路開拓ビジョン調査事業報告 12
- インターネットホームページ『JAPAN DESIGN』の今後について 12
- 「JAPANTECH '98」テーマゾーン提案展示「テキスタイルとひかり」具体化へ 14
- 剣持 仁さんを偲ぶ 14
- 会員の異動 15
- JID NEWS関東 16
- JID NEWS中部 18
- JID NEWS関西 20
- JID NEWS九州 22
- 新入会員の紹介 24

第18回IFI総会・ダブリン城内
(9月23日)



スポンサード・ランチも交歓の場
(9月23日)

中川IFI理事による会計報告（右端）
(9月23日)



は、IFIに収められる名義料の50%を主催会員団体に還付する。

- World Design Cooperation の提案：デザイン3団体理事で構成する通常連絡会議。
- IFI 学術団体協議会の設立：デザイン関連大学間の情報交換、人的交流、プロジェクト同時展開などの活動計画、支援。
- IFI 新雑誌“FRAME” ’97/12月発刊

⑤テーマ別自由討議(分科会)：半日掛けた分科会は●持続可能なデザイン●職能を守る呼称保護問題●デザイン教育スタンダード●ユニバーサルデザインの4テーマで行われた。これに先立ち、スウェーデンの代表から“IFIの未来”と題しての宣言が行われた。総会議事録は、資料としてJID本部・事務局に保管されている。

未筆ながらこの度、当アイルランド総会をもって2期4年に渡るIFI理事を辞任いたしましたことを報告いたしますと共に、任務遂行に当たり終始ご支援、激励くださいましたJID会員の皆様に紙面を借りてお礼申し上げます。

IFI '97 アイルランド 第18回 IFI総会(ダブリン)に出席して

本部・国際委員会副委員長 山田 隆二

日程上、出席が難しくなった李国際委員長の代りとして、初めての代表出席でした。

議事の冒頭、旧知の仲のノルウェー代表、スタイナー・ヒンデネス氏と共に、選挙管理人に選任され、今までにない、より意味深く緊張するIFI総会経験となりました。

議事の大部分は、賛否のカードの提示といった投票によって行われましたが、幾度かは、シンシア・ウィルソン事務局長を含めた私たち3人のカウントが合わず、会場を湧かせもしました。

次期理事の選任、2003年の開催地選定は、無記名の秘密投票となり、3人が別室にこもって開票作業を行いました。大変厳格な投票検査と結果についての討議、規約チェック、決定権のある議長国＝主催国理事長への報告提言、投票用紙の厳重な廃棄、また、守秘を誓ったりと気の引き締まる作業でした。

2日間の会議で特に印象に残ったことは、初めてお目にかかったIFIの創設者で初代の会長だった、デンマークのクリスチャン・エンネボルドゥセン氏の要所要所での発言でした。大変辛辣ではありましたが、ウィットに富み、貫禄ある静かな語り口で、他の発言者のときとは会場の反応が違うように感じられました。

また、2日目の午後の分科会では『タイトル・プロテクション』に出席し、インテリア・アーキテクトなどの呼称問題をテーマに討議しました。その席にも出席されていたエンネボルドゥセン氏の的確な発言が、短い分科会の時間を歯切れの良いものにしました。討議の結果は、国による事情の違いが大き過ぎ、『呼称』ではなく、仕事の中味と範囲が問題であると集約されました。

最後に、私たちJID会員だからこそ身近であるIFI会議なのですから、この場を数多くの海外デザイナーとの交流の場として、ぜひ活用しようではありませんか。

国際化・国際交流などで指摘される日本人の苦手な“言葉”はつぎの問題であり、まず、“出会う”ことがいかに大切かであり、いかに多くの新たな視点をもたらすかにつながると思います。

IFI '97 アイルランド 教育会議と基調講演

理事長 泉 修二

高層ビルの無いのんびりとしたダブリンでの総会、アイルランド屈指のリゾート地といわれるキラーニーでのデザイン会議と、「IFI '97 アイルランド」は、場所を替えて行われた。これらの中から、私の担当であった総会での24日のセッションと、デザイン会議の流れをつくった基調講演について記す。

● 教育会議は「IFI '95 NAGOYA」でパネリストをされたスウェーデンのオーレ・アンダソン氏を議長に行われた。論題は教育課程やカリキュラムなどを中心としたが、各国の状況の中でインテリアアーキテクト、デザイナーの職能は何かに集約されたといえよう。

実務と創造、知識と経験、研究と実地的な商売とのバランスは、教育課程の年限と方法に関わるからだ。近代のデザインを20世紀をかけて構築し、世紀末の問題に当

面する欧米、開発途上のアジア、アフリカの状況は、方向というよりもレベルとして、侮蔑感やある種の対立を感じさせた部分もあった。ほかのセッションにも主題として取り上げられたインテリアアーキテクトのタイトルを守ることも、インテリアデザイナー、プロダクトデザイナー、デコレーターとの峻別と誇りを基盤に持つからだ。

職能として備えるべきスタンダードや資格問題も、共通の基盤上にあることを確認した2時間であった。

● 多くの賞を持ち、世界に知られるアイルランド詩人ジョン・モンタギューのスピーチは、人柄の見える柔らかさで人間性、地域文化、自然との共存を訴えた。

ユリシーズの著者ジェームス・ジョイスの根底にある回帰、循環の思想の展開から生まれ故郷へ戻る締めくくりの鮭の回遊の話まで、直接胸に通う展開だった。

石を材料としたヘンリー・ムーアやニューヨーク・ブルックリン育ちの彼自身の体験のくぐりも、自然を中心に置く環境と文明の在り方を十分に感じさせられた。

Identity と Place の旅

理事 長岡 貞夫

私は久しぶりにヨーロッパを旅した。アイルランドで開かれた「世界インテリアデザイン会議」のゲストスピーカーとして招かれ、講演をしたあと、友人のデザイ



キラーニー会議は、ケルト音楽の生演奏と映像で始まった（9月26日）



「IFI賞」受賞者Arthur Gibneyさん（9月26日）

ナーの案内でオランダを訪問、建築とデザインの最新の成果を見て歩いた。

アイルランドは初めてである。「ユリシーズ」、「ダブリン市民」の著作で知られる作家ジェームス・ジョイスの生地で、ケネディの家系や、デザイナー／アイリン・ 그레이がアイリッシュであり、食後酒のクリームリキュールで有名なベイルリーの産地、また、ケルトパターンで知られるケルト文化を育んだ風土の国である。

「Identity and Place」という演題で、オーストラリアのデザイナー Mark Watson 氏、地元アイルランドの建築家 Sean O Laoire氏と筆者がスピーチした。

M. Watson 氏は、オーストラリアの先住民アボロジニと、200年前に入植した欧米人の互いの文化の違いによる摩擦と同化について、比較文化（デザイン）論的立場から、アボロジニの伝統文様を示しながら、後者は前者の多様なイデオロギーを理解し、もっとそのアイデンティティーを尊重しなければならないと述べた。

Sean O. Laoire 氏は、ヨーロッパの端からのこだま (echoes from the edge of EUROPA) の副題で、アイルランドの歴史的な背景をトレースし、ケルト人によるケルト文化の誕生から、現在のアングロアメリカンを軸にした文化形成に至るクロスオーバー文化に内在する複雑な矛盾について語った。そして、自国に対する各自の思い — Love — は多様だが、これからは新たなパラダイムの構築によって、アイリッシュデザインのアイデンティティーを確立するときであると結んだ。欧州人（白人）である両氏のテーマに対する究極の答えは、人種・民族・宗教に収斂するのだというように思えた。

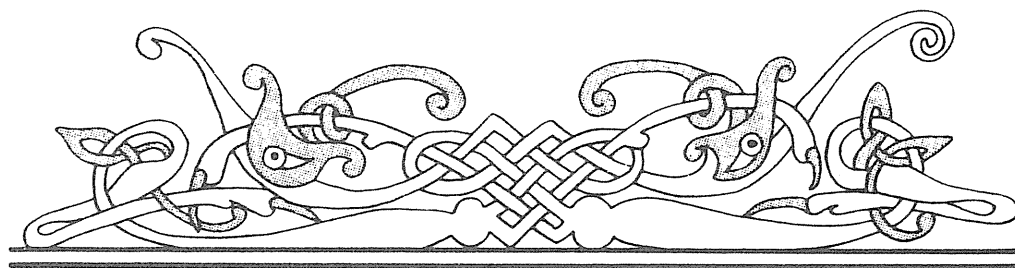
私はデザインとその国の風土について述べた。その国にはその独自の歴史と文化があり、それは形成された国土と、自然環境が育んだものにほかならない。デザインには、時と共に変わるものと変わらないものがある。変わらないものこそ、それは、その国の風土の生んだ国民性や伝統に根ざした部分なのである。すなわち、デザインにおける「不易流行」である。こういう意味のことを、日本の自然と衣食住のかかわりを伝統的な住居建築を中心に、その美意識とくわびくさびの精神を説明したりしながら述べた。一つの例として、私は「風呂敷」を取り出し、その包み方を実演してみせた。1枚のシンプルな布が、いかに使い勝手の多いことか — 多用途空間

の「和室」にみられるように、ここに日本人の重層的な思考方法がある。というような話をしたのだが、これは大受けであった。それは、ミースの言うless is moreの欧米合理思想に相通じる共通点と、その普遍性に共感したのだろう。キラーニーの会場で多くの旧友と再会した。旅は旅先での人との交流によってその印象を深める。

会議の後、オランダの3都市を廻った。ユトレヒトにあるリートフェルトのシュレーダー邸をはじめ、都市郊外の新しい建築物を見て歩いたが、非常にコンセプショナルで、実験的なデザインが多いのに驚かされた。ジャーナリスト出身の異色の建築家レム・クールハースや、メカノの斬新なコンストラクションの作品が印象的であった。また、イタリアのレンゾ・ピアノ、イギリスのノーマン・フォスター、アメリカのリチャード・マイヤーなど世界をリードする建築家の作品も多く、いまオランダは、刺激的な建築デザインのメッカになりつつあるといえよう。旅は異質に驚き、同質に安堵する。

そういえば旅から帰って、ライトの伝記ドキュメンタリー映画「フランク・ロイド・ライトと日本の美術」を見た。1905年に来日した旅人ライトは、自然と建物が調和した日本の風土に魅了された。特に、浮世絵に日本の美学 — 不要なものを排除し、単純化することによって本質を際立たせること — を見だし影響されたという。旅での見聞が視野を拡げ創造を刺激する。

21世紀は情報化時代。あらゆる分野で、地球規模での同質化による個性の埋没が心配される。今回の旅は、私に固有・独自・場・伝統・風土・日本、そしてインターナショナルとナショナルとはを考える機会を与えてくれた。



アイルランドのケルト模様の1例

年末・年始の休業

（本部・事務局）

年末・年始の休業は、右記の通りとさせていただきます

平成9年12月27日(土)～

何かとご不便をおかけいたしますが、よろしくお願いいたします。平成10年1月4日(日)

IFI '97 アイルランド大会と 北欧ユニバーサルデザイン視察ツアーに参加して

中部事業支部担当理事 関 里繪子

今回の旅を象徴するかのように、SAS の機内は一緒に乗り合わせた Handi-cap の一団の楽しい笑い声で、賑やかな始まりとなった。13時間の機上も、思いのほか短く感じられ、コペンハーゲンの小さくシンプルな空港に降り立ったときは夕刻、日本時間の真夜中とは思えぬほど、皆元気でした。コペンのうっすら寒い風が頬をかすめ、異国の旅の始まりに、身の引き締まるのを覚え、これから出会う優しい人々への期待に胸が膨らんだ。

コペンハーゲン・マルメ・ストックホルムへと移動しながら、身体不自由者の住居、老人の介護用施設と集合住宅、公団住宅群、図書館、美術館、墓地など4日間で9個所に及ぶ見学は、残り2週間の旅を控えた私には、さすがにハードで、現在でもその整理は至難なところだ。しかしながら今思えば、この充実した企画のお陰で随分と勉強させてもらった。

見学途中のバスの中で、Barrier-free, Handi-cap, Universal-design など、通訳の人への質問が出たが、アイルランド大会の後で、スウェーデンに舞い戻った私は、友人や仲間を通してその意味を十分理解することが出来た。日本人はとかく先進国の形象のみを真似し、失敗する嫌いがあるが、デザインはそのコンセプトの現れであることを私たちは知っている。

紙面の関係で詳しくは述べられないが、彼らのデザインコンセプトが、全てユニバーサルから生まれ、バリアフリーもハンディキャップも、ただ老人や身体不自由者のためだけの言葉ではないことは、今回の旅行を共にした人たちには、少なくとも理解出来たと思う。

個人の尊重を重要視するコミュニティ社会(Commune)の形成にはまだまだ遠い日本だと感じさせられ、若者たちに充分伝えて行きたい思いで一杯になった。IFI大会の基調講演で、力強く朗詠した老詩人のあの雄々しい姿が、目に焼き付いて離れない。彼らの立っている黒い岩盤の大地のように…。



ストリートの広場（コペンハーゲン）

北欧ユニバーサルデザイン 視察ツアーに参加して

(株) INAX 新宿ショールーム 高橋 秀子

今回は、ショールーム
のお客様でもあるJIDの
方々のお誘いに甘え、仕
事抜きで、総勢22名の中
に「電動車椅子」で参加
させて頂きました。

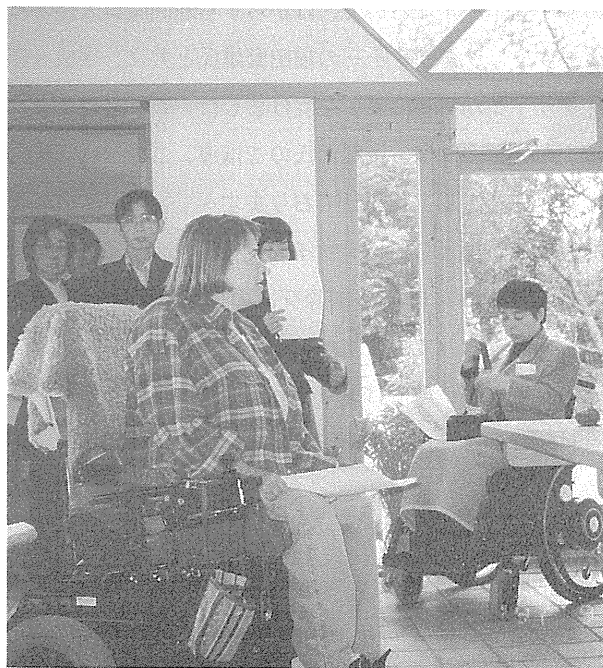
デンマークでは、現場
見学として、障害者が在
宅介護で自立生活をしているお宅を2件訪問したり、公
共の住宅団地を訪れたりしました。

スウェーデン、フィンランドと福祉先進国と言われて
いる北欧視察で感じたことは、住宅改善や介護など、
個々への福祉対策のレベルの高さは、現在の日本と比べ
るとかなりの差を感じました。しかし、歴史的な建物や
町づくりの保存と、ユニバーサルデザインの共存は、
ハード面では無理があるかと思いました。新たな建築物
では、ユニバーサルデザインを意識していることを感じ
ましたが、日本との格差はそれ程でもありませんでした。



大きな違いを感じたのは、町づくりやインテリアで、心
にやさしさや安らぎを与えてくれるような色使いや空間づ
くりがされていることでした。さらに大きな違いは、ど
こへ行っても優しく暖かい視線と何気ない手助けでした。

旅行中は最高の天気恵まれて、石畳のガタガタ走行
のきつかった点を差し引いても、十分に北欧の初秋を満
喫出来た旅でした。



在宅障害者の住宅改善現場見学（デンマーク）
中央の方が居住者、右端が筆者



スウェーデン・マルメ市の図書館前にて / 総勢22名

平成9年度デザイン功労者表彰を 受賞して

関東事業支部会員 白石 勝彦

去る10月1日の「デザインの日」に、東京・霞ヶ関のイイノホールにおいて、はからずも通商産業大臣よりグラフィックデザイナーの福田繁雄氏と共に、平成9年度デザイン功労者の表彰を受けました。これはひとえに協会の先輩、同輩、後輩諸氏のご指導、ご鞭撻、ご協力の賜物と感激し、感謝しております。

表彰の事由として、デザインの普及、デザインの向上又はデザインに関する国際交流の推進に顕著な功績があった人となっていますが、いずれも現状としては、まだ満足すべき状態ではありませんので、今後も表彰を機会に、その推進に努力を続けていく所存です。

私は仕事を次のように

「生活のための仕事」

「やらなければならない仕事」

「やりたい仕事」の3つに分けています。

生来商売の下手な私は、収入の伴う「生活のための仕事」が苦手で家族に苦勞をかけてきましたが、頼まれたら断れずに引き受けてしまう。「やらなければならない仕事」例えば行政、自治体、団体、教育などの、いわば<世直し>的な仕事に対しては、変な正義感がはたらき、つい夢中になってしまいました。「やりたい仕事」のほうは、ヨットや帆船模型の製作など、むしろ持ち出しになります。

今回の「デザイン功労者」の表彰は少なくとも「生活のための仕事」「やりたい仕事」の結果としてではなく「やらなければならない仕事」の功績を認めて頂いたものと思っています。この仕事は充分な収入を伴わない奉仕の精神によることが多く、このことは、数10年来やっているボーイスカウトの精神と、深い繋がりがあるような気がします。



表彰式で挨拶される白石勝彦会員

IFI がインテリアデザイン誌 「FRAME」を発刊 トップレベルの国際誌

オランダの BIS 出版社から11月末に創刊される“FRAME”というインテリアデザイン誌が、今回の第18回 IFI 総会で、正式に IFI による支援誌として承認されました。IFI 加盟団体である JID の会員の方々については、年間講読6冊分が、送料込み175マルクのところを、30%引の125ドイツ・マルク、約¥8,500円で購入できます。

創刊号が出来次第、JID 本部・事務局に送付されてきますので、ご覧の上、ぜひお求めください。内容は仲々意欲的なトップレベルの国際誌とのこと。ご希望の方は、本部・事務局にご連絡ください。申込用紙を FAX いたします。

BIS 出版宛に FAX または郵送すると、明細が送られてきますので、その後に送金することになります。

(本部・事務局)

〔 平成 9 年度・第 3 回理事会報告 〕

①会議名：平成 9 年度・第 3 回理事会

②日 時：平成 9 年 9 月 13 日(土) 13：40～16：30

③場 所：(社)日本インテリアデザイナー協会

本部・事務局 会議室

東京都新宿区西新宿 3-7-1 新宿パークタワー 8F

④出席者：理事総数 15 名中（本人出席 12 名）

（理事長）泉 修二

（副理事長）中川 帛子

（理 事）今崎 務、栢原秀榮、吉良ヒロノブ、

関 里繪子、中川 千年、中川 千早、

長岡貞夫、夏原晃子、福田友美、

森谷延周（事務局長）

（委任状）浅野盛治、岩倉榮利

（欠 席）山口道夫

（監 事）金子誠之助（欠席）、川上信二

⑤議 題

I. 議 案

第 1 号議案 後援・協賛名義承認の件

第 2 号議案 会員入退会承認の件

第 3 号議案 議事録署名人選任の件

II. 報告事項

(1) 各事業支部及び本部各委員会事業推進状況

(2) 平成 9 年度収支状況報告（7 月末日現在）

(3) 理事兼事務局長について

(4) 名誉会員制度について

(5) フォーラム及び合同会議を終えて

(6) その他

⑥ 議 事

森谷事務局長より「理事総数 15 名中、本人出席 12 名、委任状 2 名、欠席 1 名で本理事会は成立した」旨報告。泉理事長より、本日午前中の合同会議を経てまもないことから、中川副理事長を議長に指名し議事に入った。

I. 議 案

第 1 号議案 後援・協賛名義承認の件

事務局長が下記 7 件について説明した。

議長は承認を諮り、異議なく承認された。

◎「華胥の夢博 '97」

後援・継

1997 年 10 月 15 日(水)～19 日(日)

主催 (助)大川総合インテリア産業振興センター

◎「JAPANTECH '98」

協賛・継

1998 年 1 月 28 日(水)～31 日(土)

主催 (社)日本インテリアファブリックス協会

◎「TOKYO 画材ショー '98」

協賛・継

1998 年 2 月 13 日(金)～14 日(土)

主催 全日本画材協議会

◎「アキッレ・カスティリオーニ東京展」

後援・新

1998 年 3 月 13 日(金)～4 月 12 日(日)

主催 (株)リビング・デザインセンター

◎「第 5 回国際陶磁器フェスティバル美濃 '98」

協賛・継

1998 年 10 月 23 日(金)～11 月 3 日(火)

主催 国際陶磁器フェスティバル美濃 '98 実行委員会

◎「セミナー『快適商品の開発ソフトー生理人類学アプローチから』」

協賛・継

1997 年 11 月 20 日(木)～21 日(金)

主催 日本生理人類学会

◎「第 3 回木造建築物に関する研究会」

後援・新

1997 年 10 月 15 日(水)

主催 日本集成材工業協同組合

第 2 号議案 会員入退会承認の件

事務局長が下記 4 件について説明した。

議長は承認を諮り、異議なく承認された。

入会 正会員（2 件）

氏 名	支部	保 証 推 薦 人
政 岡 寛 之	関西	小宮 容一・香川 深雪
川 田 明 美	関東	田島 憲悟・日方 和城

退会 正会員（1 件）

氏 名	支部
加 藤 礼 三	関西

退会 賛助会員（1 件）

社 名	支 部
グラナイト エス・エー・エム 東京	関 東

第3号議案 議事録署名人選任の件（2名）

議長は、中川千早、長岡貞夫両理事の承認を諮り、異議なく承認された。

II 報告事項

各事業支部及び本部各委員会については各担当理事、本部事務局については事務局長が、資料を基に報告した。

(1) 各事業支部及び本部各委員会事業推進状況

理事長より、本日午前中の「平成9年度第1回合同会議」（別紙議事録参照）にて現状と今後の取組みについて報告を得た。従って、理事会における事業推進状況報告は割愛し、特別の補足説明、及び質疑にとどめたい旨の発言があった。以下はその箇所である。

● 関西事業支部

「USD-O」とはどんな団体か。（吉良）

大阪デザイン団体連合と称し、関西デザイン関連12団体によって構成され、団体相互の交流が主である。なお、来る10月4日開催の「デザイナーレ'97」の構成団体の一員であると説明があった。

（栢原・夏原）

● 国際委員会

補足説明あり。「IFI '97 アイルランド大会と北欧ユニバーサルデザイン視察ツアー」は、若干参加者が減り、参加費用は若干アップとなるが予定通り実施される。（吉良）

IFI アジア地域代表理事選出に関して、日本としては韓国、マレーシアを押すことにしているが、第18回IFI総会（9月23～24日）にて決定される。

（中川帛）

なお、本日開催の「合同会議」を受けて、相互のコミュニケーションを密にするため、理事会提出の各事業支部及び本部各委員会報告資料を、今回より理事会後に、各支部長・本部各委員会委員長に配布することにした。

(2) 平成9年度収支状況報告（7月末日現在）

4月1日～7月31日現在の収支状況を資料に基づいて要点を報告。なお、平成6年度～平成9年度の会費納入状況各月別推移グラフにより、例年の納入状況を説明した。

(3) 理事兼事務局長について

兼務について過去の経緯を含め、どう捉えるかについて討議した。以下は主な意見である。

1)過去にも同様のケースがあったが、責任ある業務の遂行や運営のスムーズ化などから容認していた。

2)不適とする場合は、明快な理由が必要である。会員・理事・事務局長相互間の就任可否のみ考えると、職業上の自由を束縛することになる。従って、定款などを含め理論的整合性を持たせなければならない。

3)業務に関連して「就業規則」の条文の一部を確認した。

（禁止事項）職員は、理事長の許可を受けなければ、営利を目的とする私企業を営み、又は報酬を得て、いかなる業務若しくは事務にも従事してはならない。

4)法人組織における兼務は、相反する関係となり、原則的にはありえないのではなかろうか。

5)他のデザイン団体でも、是非の両論があるが、制度化せず比較的自由に捉えている。

6)定款の改訂だけに限らず、JIDの運用上の問題として、ルールの検討をしてはどうか。

7)事務局長を1つの職業と捉えてよいのではないかと考える。十分検討し、兼務不適の結論に達した場合は、定款はじめルールの改訂を行い明文化を図る。

8)事務局長という職務や人選には、ルール上のシステムと採用上の現実問題が存在する。従って、柔軟な面を考慮しておく必要がある。

現・事務局長としては、本来的な論議を尽くし、会員に十分説明できる状態にすること。必要により定款などのルールを改め、それに従っていきたいとした。続いて議長から、この件は本日の討議を踏まえて、次回または次々回に議案として上程したいとした。

(4) 名誉会員制度について

去る6月20日、通産省デザイン政策室より口頭にて、同制度の廃止または、該当者を減らすことについて、再度、資料により報告。理事長より、慎重に考えることとし、当面年度内は現行のままで対応したいとした。

(5) フォーラム及び合同会議を終えて

フォーラムについては、発言者の記名入りで要領よくまとめ、機会をみて全正会員に配布する。記録テープについては希望者に公開する。また中部・関西などにおいても継続的に開催することを考えたいとした。なお、協会に対する期待という視点から、近年の新入会員を対象に、各支部でフォーラムを開催してはどう

かとの提案があった。

(6) その他

- 異動 IFI 事務局長：新 Chris Buchanan

(Mr.) 10月1日より

- JID NEWS 8・9月号9月30日発行（予定）

- 次回理事会開催予定（'97 第4回）

平成9年11月12日(水)

議長は報告事項について了承を求め、理事会はこれ了承した。

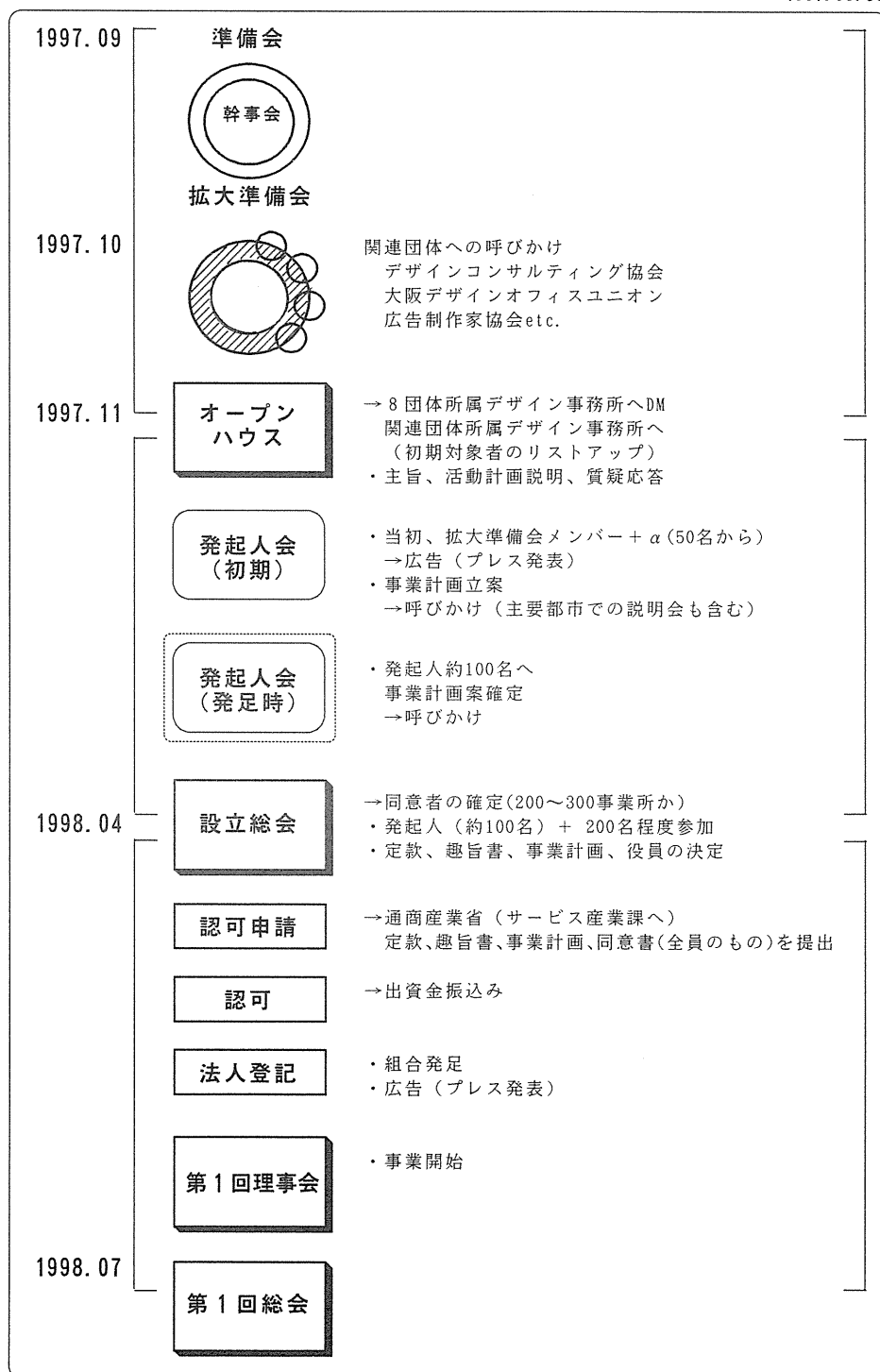
「全国のデザイン事業所による 事業共同組合」設立について

設立準備委員 長堀 映司

デザイン事業所の職能基盤の確立を目的とし、共通する課題を解決していく団体として、「日本デザイン事業協同組合」（仮称）を設立するため、デザイン 8 団体が

●組合設立までのプロセスとスケジュール

1997. 09. 30



中心メンバーとなり、「全国のデザイン事業所による事業協同組合」設立準備会・第1回幹事会が、平成9年7月16日(水)、日本産業デザイン振興会において開催されました。

会議に先立ち、座長に「JPDA」の金子修也理事長、副座長に「SDA」の赤瀬達三副会長を選出しました。

また、今までに5回の幹事会を重ね、ほかの協同組合の調査、設立趣意書(素案)、定款(案)などのまとめがほぼ終了し、これから8団体以外の関連団体へ呼びかけ、メンバーを増員し、拡大準備会に移る段階になりました。

なお、委員の拡大に伴い JID からは坂本和正、藤村盛造の2会員に参加頂くことになりました。

協同組合設立までのプロセスとスケジュールは左表のようになりますが、とりあえず中間報告として会員の皆様にお知らせいたします。

注1：JPDA = (株)日本パッケージデザイン協会

注2：SDA = (株)日本サインデザイン協会

活路開拓ビジョン調査事業報告

本部・教育研究委員会副委員長 藤川 征輝

去る9月29日、第2回調査事業委員会を東京・OZONE セミナールームで開催いたしました。また、今回から新たな専門委員に高橋 元氏も加わり、より具体的な検討が行われました。

今回の調査は、オーガニックコットンに象徴される天然繊維に的を絞って、地球環境と人に優しいという視点から、いろいろな立場の方々にアンケートなどを実施し、天然繊維のインテリアでの可能性を、より広げるための「報告書づくり」の準備に入ることを確認しました。

JID 会員の皆様にも、アンケートによる回答をお願いをすることになると思いますが、その節はご協力をよろしくお願いいたします。

2月末までに最終的な報告書を作成する予定ですが、その「抜粋」を JID 会員にも配布できたらとも考えております。そして、意義のある報告書を完成させて、次年度の実施事業につなげて行けたらと願っております。

インターネットホームページ 『JAPAN DESIGN』の今後について

本部・総務委員会委員長 秋山 修治

すでに何回もお伝えしておりますが、(財)日本産業デザイン振興会が運営し、振興会並びに当協会を含むデザイン8団体が参加したインターネットホームページ『JAPAN DESIGN』が展開されています。

● この件については、JID NEWS 誌上で何度か報告('96年10・11月、'97年3・4月号及び8・9月号の日本デザイン団体協議会／代表者会議報告の一部)していますので、改めて再読してください。

今号では、その後の進展及び各団体の動きと、今後の当協会の検討課題などについて述べたいと思います。

まず、他団体の動きですが、実施面を全体的に見た場合(株)日本グラフィックデザイナー協会が一步リードし、つぎに、(株)日本インダストリアルデザイナー協会、(株)日本ジュウリーデザイナー協会と続いています。

『JAPAN DESIGN』は、(財)日本産業デザイン振興会の活動(デザイン関連イベント、Gマーク、デザイナーの作品展示)のインフォメーションのほか、デザイン8団体のホームページを開設し、各団体の活動状況と会員名の紹介、それに加えて、より深く日本のデザイナーと作品を紹介する『WHO'S WHO』というコーナーの設定です。

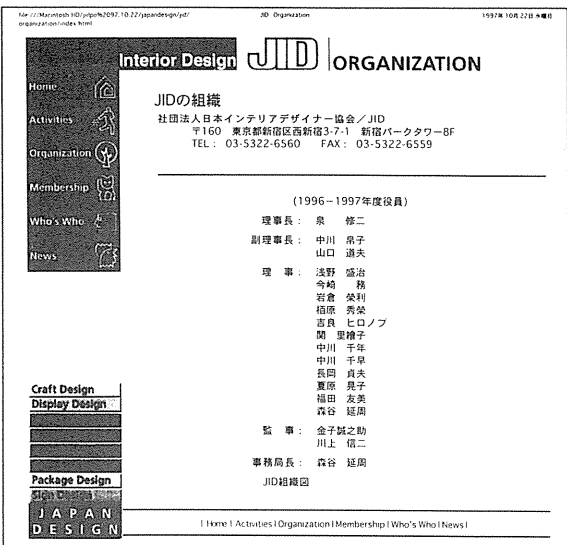
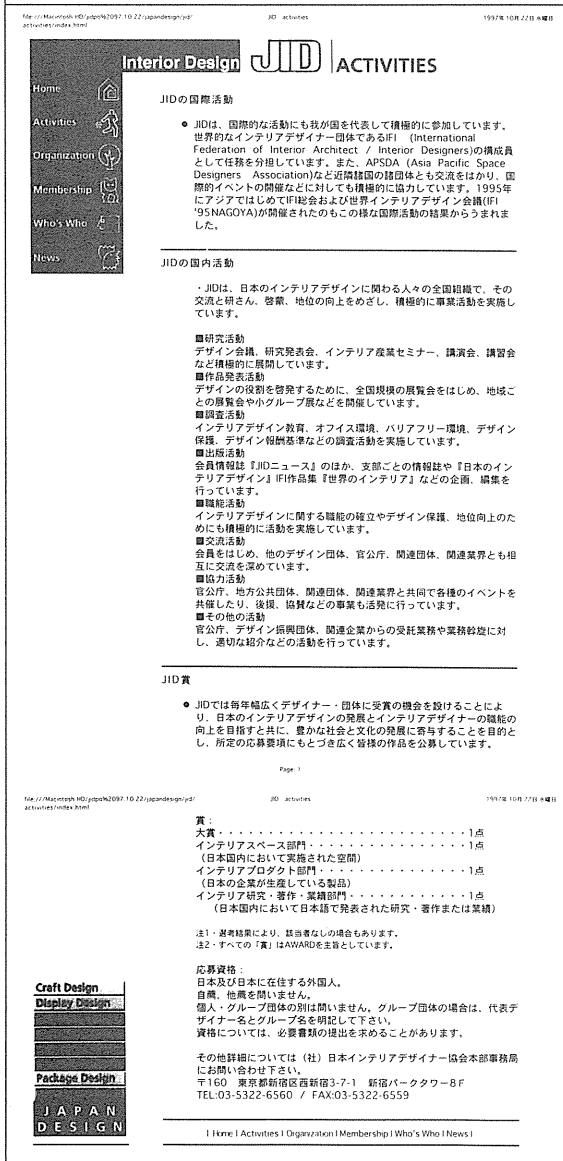
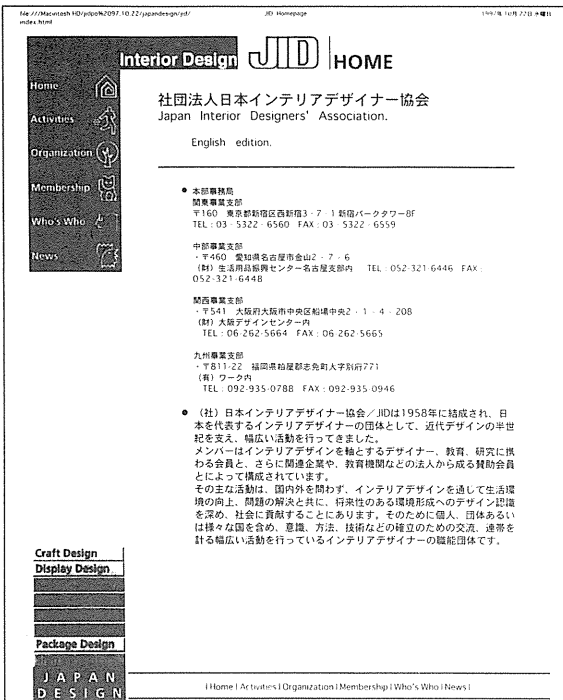
『WHO'S WHO』は、デザイン8団体のホームページとリンクし、8団体に所属するデザイナーの情報と4点までの作品の紹介を行うというものです。また、すでにデザイナーが個人でホームページを開設している人については、『WHO'S WHO』から、個人のホームページへ、リンクできるように計画されています。

当協会としても、今後各会員の『WHO'S WHO』への参加希望の有・無(『WHO'S WHO』は有料展開)や料金システムの検討などについて、会員の意見収集を行い、本部総務委員会のデジタル研究会が推進役になり、『WHO'S WHO』に何らかの形で参加することになると考えられます。意見収集については、近々にアンケート調査を実施できるように、現在準備中です。

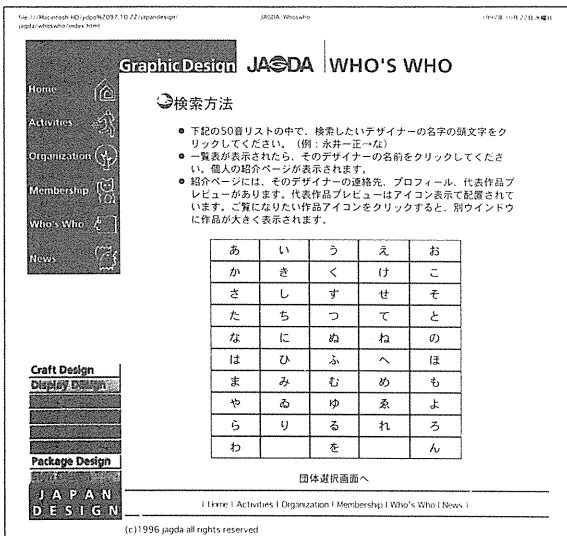
現在インターネットホームページ『JAPAN DESIGN』上で展開しているJIDの画面及び、『WHO'S WHO』のページを紹介します。今号ではその例として、(株)日本グラフィックデザイナー協会(JAGDA)の会員のものを紹介いたします。

なお、現在下記のアドレスでインターネット『JAPAN DESIGN』から JID のホームページ(邦文・英文)を見ることが出来ます。インターネットに接続されている方は、ぜひ、ごらんください。

インターネットホームページ『JAPAN DESIGN』の
アドレス <http://www.jidpo.or.jp/japandesign/>



ホームページ「JAPAN DESIGN」JIDの画面(左及び上)



「WHO'S WHO」JAGDA の画面 (上)

「JAPANTEX '98」テーマゾーン提案展示 「テキスタイルとひかり」具体化へ

ワーキンググループ 村口 峯子

(株)日本インテリアファブリックス協会より受託した、「JAPANTEX '98」テーマゾーン提案プロジェクトは、その後順調に進み、10月中旬には、試作による検討を行いました。

今回の提案展示の最大のポイントは、会場となる東京ビックサイト・イベントゾーンの広いアトリウム空間と天井から入る日中の光をどう扱うか、いかにダイナミックに「ひかりとテキスタイル」を見せるかというところにあります。

今回の試作検討は、光源とカーテン地などの布サンプルを用意し、1/5 モデルに光源や布を取り付け、その効果を試みる作業でした。それぞれのプロのメンバーが力を合わせ、ものを創る面白さを味わうことが出来る、大変刺激のある内容でした。

限られた予算の中で、どれぐらいのインパクトが出せるかが悩みですが、1月の展示が楽しみに想像できる試作検討でした。

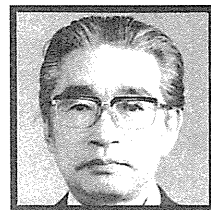


1/5 モデルにより、光源と布地の透過効果をチェック

「剣持 仁さんを悼む」

関東事業支部会員 川上 信二

10月10日 わが良き先輩、剣持 仁さんが亡くなられた。電話で訃報を知ったとき、何とも言いようのない寂しさに襲われた。



偉大なデザイナーであった実兄の剣持さんには、間違っても「勇さん」などとは、言えないのは当然であったが、それほど年の違わない弟の彼に対しては、なんのためらいもなく「仁さん」と呼ばせて頂いていた。

図らずも、産業工芸試験所、職業訓練大学校と職場を共にしたが、終始変わらず心温まるユーモアと、心から共感できるペース溢れる話振りが、その時々的情景に重なりあって思い出される。多少アルコールが入った後の話ぶりは特に愉快であった。

私にとっては、九州時代のクラフト指導の経験話は、特に貴重であったが、デンマーク留学時代のハンス・ハンセン氏を通じてのデザイン観を語る仁さんには、デザイン学徒としての真摯な姿に畏敬の念を抱いたものである。その反面、床屋やトイレの失敗談には何度聞いても涙を流すほど、腹を抱えて笑ったが、いま思い出してもオカシナ話である。

職業訓練大学校時代、訓練部長としての業績は、だれも疑う者はないが、私にとっては、仁さんが産工試の遺産保存に傾けた努力に対して、限りの敬意を抱いている。筑波への移転で、散逸しかかっていた試作品、参考品、そして図書類、これらの可能な限りの活用を、大学校図書館に求め、譲渡保管し、現在貴重な財産となっている。「工芸ニュース」全巻揃いもそのなかの一つである。

仁さんとは、朝倉書店の「家具の事典」の編集、途中挫折そうな私たちを、編集長として支えてくれ、5年がかりで出版にこぎつけたが、それも今は良き思い出になってしまった。

仁さんのご冥福を心よりお祈りします。 享年82才

【 会 員 の 異 動 】

● ご面倒でも、1997～1998年版「会員名簿」の該当ページを開けて、ご訂正ください。（24頁に続く）

● 正会員

会 員 名	異 動 事 項	新
今 井 壽 志 (関東 P53)	自宅移転	東京都大田区上池台5-1-25 RIN'S HOUSE202 〒145 TEL 03-5499-7018 FAX 03-5499-7019
小 畑 次 郎 (関東 P64)	事務所移転	秋田県秋田市八橋本町3-13-17 〒010 TEL・FAX 変更なし
鹿 島 幸 雄 (関東 P65)	事務所・自宅移転	千葉県富津市小久保2782 〒299 TEL・FAX 0439-65-5530
畔 柳 由利子 (関東 P72)	自宅移転	東京都目黒区柿の木坂1-9-15-206 〒152 TEL・FAX 変更なし
佐名川 威 志 (関東 P80)	事務所・自宅移転	東京都墨田区向島2-18-1 ベルメゾン向島601 〒131 TEL・FAX 03-3621-9736
須 田 佐和子 (関東 P87)	事務所・自宅 TEL・FAX	TEL・FAX 047-370-2836
藤 田 政 志 (関東 P114)	事務所移転	東京都渋谷区渋谷1-3-18 ビラ・モデルナA401 〒150 TEL 03-3406-5212 FAX 03-3406-5213
渡 部 式 部 (中部 P148)	事務所 TEL・FAX	TEL・FAX 0566-21-9871
式 田 完 (関西 P162)	事務所移転	大阪府大阪市中央区南船場3-3-24 芦池福田ビル5F 501 〒542 TEL・FAX 変更なし
杉 浦 房 江 (関西 P163)	事務所移転	愛媛県松山市針田町94-13 〒790 TEL 089-974-8100 FAX 089-974-8200
西 村 太 志 (関西 P169)	事務所・自宅 FAX	FAX 075-381-3855
杉 村 久 美 (九州 P186)	事務所名称 事務所・自宅移転	設計Kü-kai (くうかい) 熊本県熊本市京町本丁7-31 〒860 TEL・FAX 096-322-9424

おめでとうございます

去る11月10日、大阪府立青少年会館文化ホールにて、関西事業支部の夏原晃子・館野羊一・七條 健会員3名が、永年の功労（デザイン関係の振興発展）によって、平成9年度・大阪府商工関係者知事表彰を受けられました。

26年振りの北欧

関東事業支部会員 小林 正典

26才のとき、憧れていた Mr. ハンスJ ウェグナーに
お会いできたと、内心密かに期待を持って北欧の旅行
に出ました。そのときには、スウェーデンを始めとした
北欧4ヶ国と、ドイツ、フランスの家具とインテリア全
般の研修をすることが出来ましたが、Mr. ハンスJ
ウェグナーには勿論のこと、彼の作品を製作する工場も
探しあぐね、痛恨の思いで帰ってきた思い出があります。

それから幾霜想、26年を経たこの6月に、仕事でス
ウェーデンに行くことが出来ました。仕事は住宅と教会
の建物の輸入の件でしたが、若いときの願いを叶えたい
と強引に時間をつくり、勝手に師と仰ぐMr. ハンスJ
ウェグナーに会い、その作品を製作している工場をも訪
れようと、心中高鳴る思いでしたが、コンタクトが取れ
ず、またもや、氏にはお会いすることが出来ませんでした。

しかし、メーカーであるPPモブラー社を探し当てる
ことができ、コンタクトも無しに訪問しましたが、着い
てビックリ、想像していた工場のイメージは根底から覆
され、本当にこんな町工場で？と、我が目を疑わざるを
得ませんでした。

ともあれ、32年前から Mr. ハンスJ ウェグナーに憧
れ、その作品を製作しているところを、日本から2度目
の旅行でやっと探し当てたことを話すと、オーナーのア
イナー・ピーターセン氏はいたく感激してくれました。

「世界的な家具が、このような小さな町工場で作製さ
れているとは思っても寄りませんでした」の話を、ピー
ターセン氏は、ここは工場ではなく工房であり、自分で
納得するものを作り上げるには、少ない人数での工房が
一番、また看板なども一切表示しないのは、本当に訪れ
たい人はそれでも必ず探し当てるものです。との説明に、
52才にもなって青年のように感激し、一言一言が新鮮に

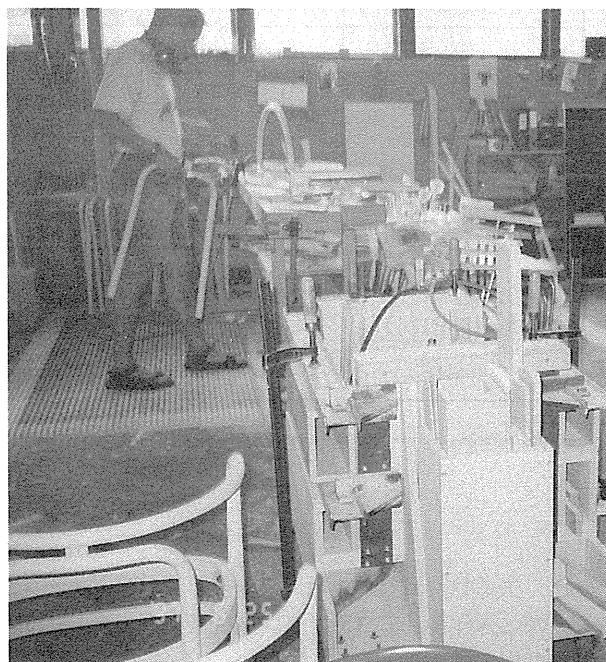
聞こえたものです。

工房内を案内して頂き、PKチェア、ピーコックチェ
ア、カウホーンチェアのPP701・PP505、バチュラー
チェアと、完成ホカホカや製作中のものを触りまくり、
本当に肌で感じて、3時間ほど工房内をうろつかせて
もらいました。

コーヒータイムときには、探し訪ねたことを感謝す
るといわれ、ハンスJウェグナーは今、バケーションで
イギリスに行ってるから、彼の『作品集』に私のサイン
をしてあげようとの素晴らしいプレゼントに、おじさん
本当に雲の上にいるようでした。

5時間もの長い時間、PPモブラー社に滞在した訳で
すが、ピーターセン氏の話の中、デザイナーと職人は一
対であり、どちらも同じ力を持たなければならないのだ
とのくだりがあり、日本のデザイナーの技術知らず、技
術無視、職人の技能低下の傾向を1人で反省しておりま
した。

日本でも素晴らしいものが製作されていますが、自分
の仕事でもあのようなレベルを保つようにしたいと、勉
強の必要と闘志を持って帰ってきました。北海道は北欧
と気候風土もよく似ており、この11月からは、千歳から
直行便で、今までよりも6～8時間も短い時間で、ヨー
ロッパに入れるようになります。若いデザイナーの人た
ちも、いまの内にドンドン訪問し、感激してほしい地域
の一つであると感じております。



PPモブラー社の「工房」

ディスプレイの原点

関東事業支部会員 星 富士子

暑い暑い夏が過ぎ、今年は9月に入っても地球温暖化による影響なのか、仕事場のショールームには、いつまでも夏のような日差しが差し込んでいました。

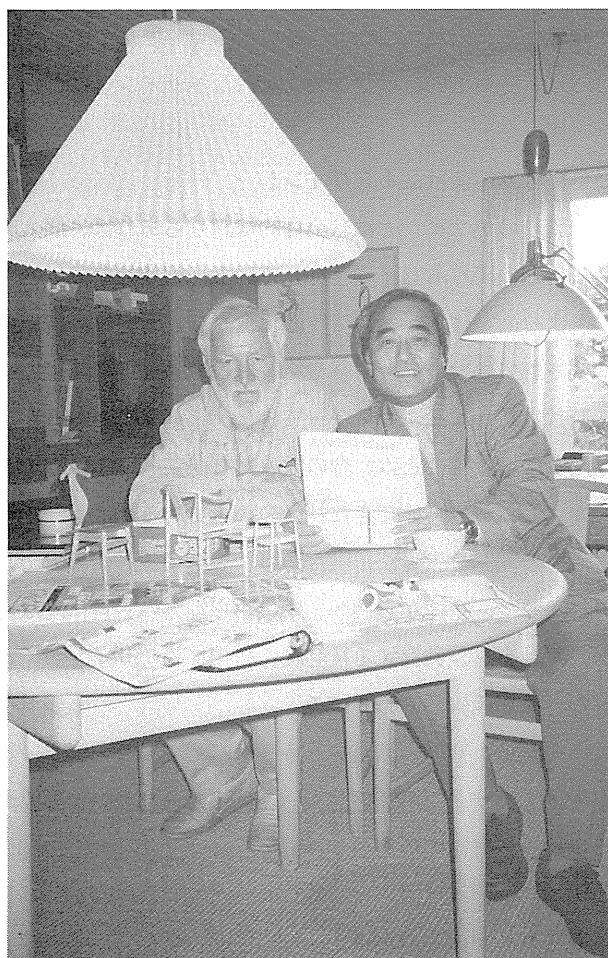
そろそろ10月になろうというとき、9月末には、ウィンドウのファブリックスのディスプレイを秋色にと考えていたのですが、つい日頃の忙しさに負け、生地はセレクトし準備してあるものの、じっくり時間をかけられず、ギリギリの9月30日、やっと「秋の恵みの暖かさ」と題し、思いのディスプレイが出来上がりました。

ベースは暖色系のアースカラーの生地で、栗・胡桃など、秋の恵みの実を添えて、やっとの思いで出来上がったという翌日のこと、お客様が立ち止まれ、「家を新

築したが、思ったようなカーテン生地が見つからず、何度かこの店の前を通って、入ってみようかと思っていた。ディスプレイが変わったので思い切って相談してみることにした・・・。」とのことでした。

そのとき、もちろん私は嬉しくもありましたが、何か反省させられる思いでした。やはり、常に何かを求め、よりよいインテリア空間をと、日々心掛けているお客様が沢山いらっしゃるのだと……。それをいかに現実のものにしてゆくのかが、私の仕事であると、改めて新たな思いを起こさせてくれました。そしてさらに、季節を感じさせる提案はもとより、プラスのエッセンスと、見る人の心に訴えるものを、つくり上げなければと思ったのでした。

「気づかせるということ」それがディスプレイの原点です。自然の風景は、四季折々自然の変化と美しさを私たちに「気づかせて」くれますが、それを基にしたディスプレイ提案は、私自身が手を加えることによって初めて人に訴えることが出来るのではないかと考えています。



PPモブラー社／オーナーのピーターセン氏と筆者（右）



ショールームも秋らしく

ふくいの宝さがしとデザイン

中部事業支部北陸部会長 坂田 守正

●『宝さがし』

1989年の通産省のデザインイヤーを契機に、ふくいの宝さがし運動を行っている。「宝さがし」とは、その地域に住む人々が何を大切に、何に誇りを見い出すかという一つのマーケティングリサーチ手法である。

既存の流通におけるマーケティングリサーチと異なり、モノのデザインだけでなく、気持ちのデザインも含むリサーチだから、議論百出の中から始めた。しかも、ボランティア活動として、知恵とお金と労力を出し合って始めた運動で、わたしも毎年わずかなお金を貯め提供し実践している。

高度成長と産業社会化の中で抹殺してきたか、もしくは排除してきたものの中に、大切な価値感が存在していたのではないかという疑問があった。

そして、宝の中にこれを解き明かす鍵が内在するのではないかという期待もあった。そして、現在、2万の宝が集り、それをどうデザインしていくか、知恵を出しながら活動が始まっている。

実は、宝さがし運動のテーマは「誇りのデザイン」がコンセプトに存在している。プライドではなく日本語の誇りである。

この誇りがどこに存在するのか、しかも地域の誇りは一体何なのか、宝さがしを実践していく中で少しずつ見えてきた。それは生活文化の中にキーワードは隠蔽されている。また、そこに生き甲斐も存在していることが分かってきた。

経済価値の中にも存在するし、文化価値の中にも存在する。経済価値には全体的な社会の流れと時代性がある。

しかし、文化価値は、個人個人の中の価値だから、見えてくる価値には繋がらないケースが少なくない。そし

て、地域の中に、立派に生き続けている価値でもある。しかも、大人よりも子供の方が正確に把握していることが分かってきた。

●『宝の存在価値』

デザインには色や形や形態も含まれるが、それだけでもない。そして、美的感性も機能性も時代と共に変化し、対象が変わることで微妙に変化していく。また、その中で価値観も変化してゆく。

さて、ふくいの宝さがしの中に「わたしの妹が宝です」とか「お父さんと一緒に行ったとき、見た峠からの景色が宝です」「毎日通学している道が宝です」という心象的な宝がたくさんあった。

これは、その人の価値だから「それは宝じゃないよ」と言えない。むしろ、「それは大切にしていこうね」という共感が生まれてくる。これは産業社会の中で、日本が見落としてきた価値観であるし、誰もが抱いている心象である。

もし、デザインが産業社会の中で迎合したデザイン活動であるとすれば、こうした価値観は、デザインしようがないし、経済効果がないと見なしてしまう。だが、デザインとは、見えないものを見えるカタチにして、関係づける仕事であれば、これも立派なデザイン価値があると思う。

●『自律協働社会とデザイン』

誇りのデザインとは、全体的な誇りもあれば、個人的価値観の誇りも立派に存在している。産業社会では、個人よりも全体と量産を文明的に位置付けられた価値が重視されてきたが、今ようやく、個性や多様化に対応する時代と言われるようになってきた。

この産業社会とは、今の大人たちが共同幻想のシナリオとして築きあげてきた社会のことである。そして「表現する場」を失った子供たちは、場を模索し始めている。

そして、全体から個へ、中央から地方へ、自律的な価値を共有し、共存する社会関係の中に、デザインが新たな位置を模索し始めている。

それは、個人の価値をどう表現していくかというインテリアデザインと関係が深い。個人の住宅や商業施設が、室内と室外の関係をつくりあげるように、社会との関係の中に、どう位置づけていくのかが問われ始めている。文化もまた個人の生活文化から広がっていくように、デザインも新たな文化の時代を迎えている。

長 大作・奥村昭雄 家具展 両氏を囲んで前夜祭

1997年10月5日

名古屋市東区 加藤邸にて

去る10月5日、長 大作さん(JID名誉会員)と奥村昭雄さんを囲んで前夜祭を開催した。6日から12日までの会期で始まる家具展の作品を前にして、ご両人の家具、インテリアの制作に対する貴重な経験を、当日参加した支部会員と約2時間にわたって懇談した。



加藤邸の和室に展示された作品の一部

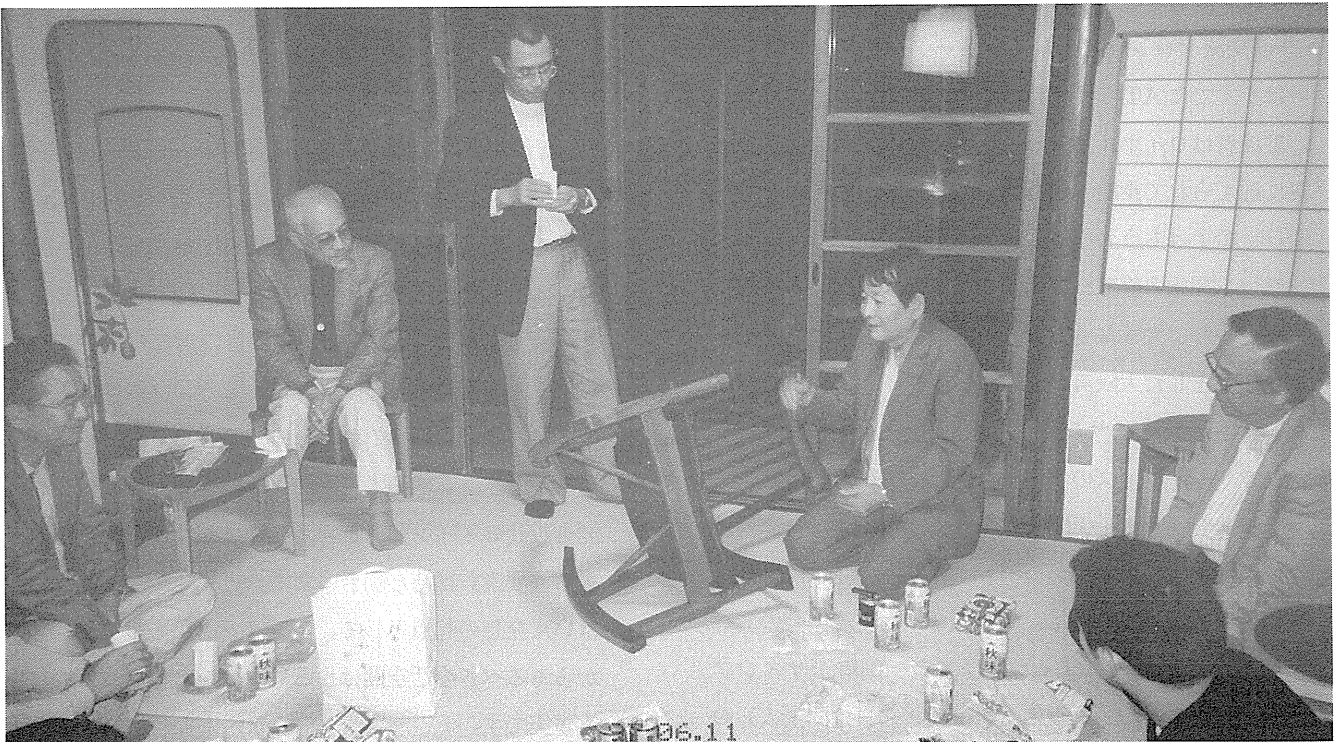
最近思うこと

中部事業支部北陸部会委員 内記 悦子

10月はイベントの月でした。「スーパーハウジングフェア」なるものに関わって、その準備に明け暮れ、一つの行事をクリアしてホッとすると、また、つぎが待っている状態でした。イベントが終わって、今は「環境共生」をテーマに仲間で勉強会を始めたところです。

2年前の名古屋で行われた「世界インテリアデザイン会議」の某分科会、そこでショックを受けたこと、「環境を考えないデザインはしてはいけない、ときには仕事をしないことを選ぶことも重要な選択である」その言葉が胸に突き刺さりました。ズットその言葉を引きずりながら、最初は身近な問題の健康住宅について学び、それから必然的に環境共生へと関心が広がっていき、ようやく2年前に聞いた言葉を、実感として感じるようになりました。いままだ始まったばかりでこれからなのですが、確かな道を歩いているような充実感と手応えを感じます。

JIDの会員であっても、県内に2人という状況では地域での活動は出来ず、できれば年に1回くらい、全国に呼び掛ける内容のイベントができないものなのでしょうか。



長 大作さんと奥村昭雄さんを囲んでの懇談風景

デザイナーレ'97（大阪）報告

関西事業支部交流委員長 山崎 晶

第8回を迎えた今年のデザイナーレ（主催：デザイナーレ大阪コミッティ〔構成＝USD・O・JDF・ODC〕）は、去る10月4日、国際デザインフェスティバルと地元大阪を結ぶ接点として【5感×心＝遊】をテーマに大阪デザイン界の意識と意欲を発信しようと、大阪南港コスモスクエアを舞台に開催された。

当日は国際デザイン展'97の初日、TWCホールでは午後1時、PART-1の国際デザインアワード受賞者の記念講演会に始まり、続くPART-2デザインフォーラムでは“〔5感×心＝遊〕をめぐって21世紀のデザインを探る”をテーマとして、「アーティスト関本徹生とその仲間たち」によって、様々なパフォーマンスが披露され、異色のフォーラムとなった。フォーラムをディレクトされた小宮関西事業支部長にはご苦労さまでした。

午後5時過ぎ、フォーラムがお開きとなる頃、PART-3の交流サロン会場となるチャーター船サンタマリア号は、すでにATC前、オズ岸壁に接岸中。

参加者はロイヤル・フラッシュ・ジャズ・バンドの演奏に迎えられて乗船、飲み放題のビールとお弁当を受け取り、船上はもうお祭り気分。

サロン開始の直前まで雨模様だった天候は、奇跡的に晴れ上がり、大きなサンセットに続いて、すっかりチリを洗い落とした大阪湾の夜景が、デザイナーレに花を添える。1階デッキ、サラ・デ・コロンの場所を移したデキシーランド・ジャズの演奏を合図に、午後6時、サンタマリア号は大阪湾一周のクルージングに出航。400名近くの参加者は、思い思いのデッキに交流の花を咲かせた。

ジャズの演奏の合間に、国際デザイン交流協会の専務理事から、国際デザイン展受賞者、国際デザインアワード受賞者（ハンスウェグナー氏／来日は同夫人）の紹介があり、交流サロンは国際的に盛り上がった。

約2時間の船上の交歓会は、アッという間に過ぎてしまい、サンタマリア号は再びオズ岸壁に。夕闇に再会の余韻を残して午後8時過ぎ散会となった。

各構成団体を代表された実行委員の皆さんのセクトを越えた素晴らしいチームワークと、献身的な働き振りが、今年のデザイナーレを成功に導いた象徴的な原動力であった。大阪に、また大きな交流の輪が広がったのである。



「サンタマリア号」船上にて

イタリア インテルニ展を観て

関西事業支部会員 舘野 羊一

大変楽しいコレクションでした。日頃『INTERNI』を見ていて、《感じる世界》と思っていましたが、それを「ATC 大阪デザイン振興プラザ・デザインギャラリー」（会期：10月2～19日）で目の当たりにして、さらに関心を深めました。正直なところ、『気になる世界のイタリア』というのがこれまでの感想でした。

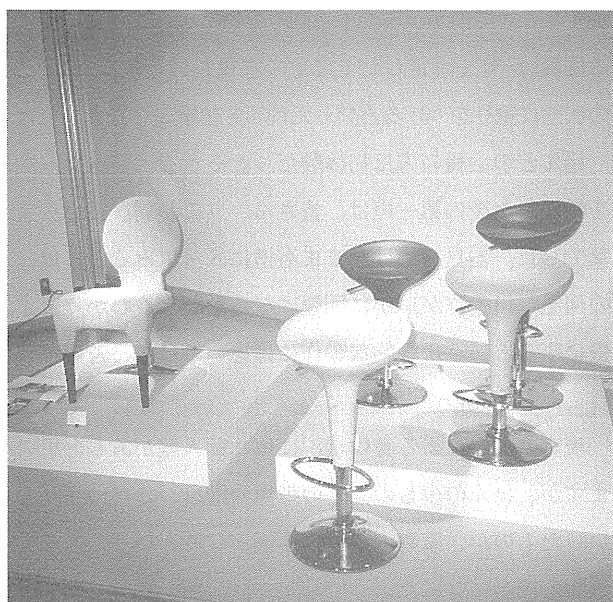
コントラクト部門で設計を長年担当し、有機総合化展開を設計のメイン使命と考えていましたので、主張しすぎる『要素』は時と場合による、と思いがちでした。とはいえ発想の起点として、エレメントが主張する『これからあるべき生活空間は』というヒントに飢えていたのも事実です。

製品としながら、イタリアでは当然なのか、ここまで

造形美を練り上げられるのか、というのが今回の率直な感想です。材料が言いやすい我がままの制約を、さりげなく高度な技術で姿に融合し、かつ低温発泡一体型ボディに見られるように、耐久性と低コストを実現するなど、改めて感心しました。

さらに、人の心に素直に語りかける『楽しさ』までも、持ち合わせているのです。

イタリアが身につけている紀元前からの人間万歳の明るさとユーモアは、私たちなりに誇りを持っていた日本の造形美に、柔らかく、しかも強烈に『これからあなたがたは、どっちに行くの』と語りかけているようで、かつ、比較にならないが、自分自身の空間発想や造形活動に対話を受けたように思えました。



展示品の一部／アトリエ・ジーアンドビー（写真左）とヤマギワ（株）（写真右）

イタリアデザイン紀行

関西事業支部担当理事 夏原 晃子

この9月、イタリアンデザインの現場に出会う機会を得られたのは、JID 会員で、国際的に活躍している喜多俊之さんの図らいのお陰である。まず訪れたのは、日本でも有名なソットサスのオフィス、彼自身は日本の「ギャラリー・間」での展覧会のために東京へ出張中。そこでディレクターのマルコサビーニさんの案内で、多様な国で多様な人々と展開するデザインについて、今手

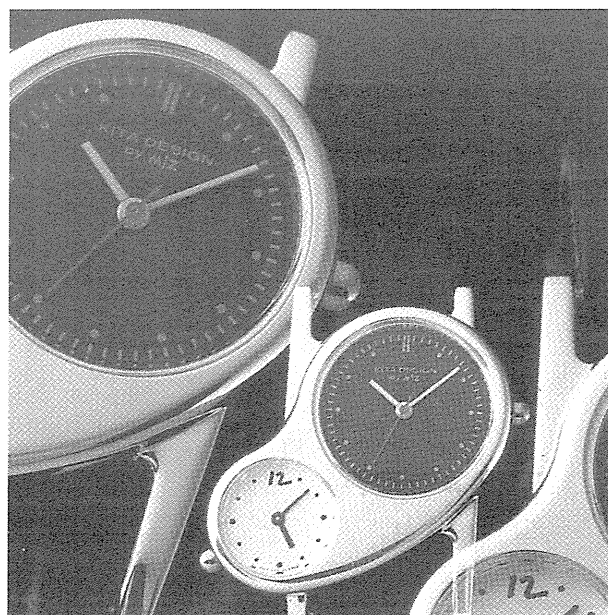
掛けている空港についてなど、話題は一杯。

つぎは、デザイン誌“ABITARE”の編集長でもあるグラフィックデザイナーのイタロルピさんのスタジオ、洗濯物が翻る下町のアパートの扉を開けると、一転シンプルでセンスの良い暖かい雰囲気工房があらわれる。その通りのお人柄で、シャイに少しづつ見せてくださる仕事の自室での応対がまた素敵です。その夜の喜多さんの新作発表のカatalogも彼の手によるものとか、益々オープニングパーティーが楽しみにになります。

ミラノのドゥオモに近い SAWAYA & MORINI のショールームは、古い壁とT字構に支えられた美しいガラス天井の建物です。壁の大きい写真と3つのケースの中の時計は銀と金と白、黒の組み合わせの知的に洗練されたデザインで、その名も“Two points watch”まさに Without - Border に活躍する喜多さんならではの、と感心。シャンペンを手集う人々の中で、にこやかな喜多さんはとても自然にミラネーゼだ。

街で両手に一杯の買い物袋を下げた女性に会った。「来週日本に来るジルダさん」と喜多さんの紹介。大阪で再会した彼女は、講演や喜多さんとの対談など、デザイン誌“INTERNI”の編集長ジルダ ボイヤルディ女史の顔も。後のパーティーで「先週ミラノでお会いしましたね」と、センスの良いデザインは日常の生活の中からという先程のお話が生きています。

時間と空間を越える距離は近くなるが、生活の感覚は環境が大切なのだと、回りからじんわり染みしてくる日々でした。



「Two Points Watch」デザイン：喜多俊之会員

第2回「例会」ユニハウスでの体験

鐵谷 知会子

第2回、九州事業支部（熊本地区担当）の「例会」を、熊本市下益城郡富合町にある「ユニハウス」で行いました。

急速に進みつつある高齢化社会に対して、ハード面でバリアフリーという言葉が使われるようになり、言葉自体に違和感を持つことは少なくなりましたが、現実には、建築、医療、保険、福祉などの各部門が、まとまりなく取り組み、社会的なニーズに応えきれていない現場がまだまだ多いようです。

「ユニハウス」はこうした現実を踏まえ、高齢者や身障者、また、疾病による身体的後遺症の残った人たちなど、個々の身体的特性に応じた住宅環境の実現のためにつくられ、しかも、宿泊可能な九州でも他県には仲々見られない施設です。

戸建住宅の形態をとり、バリアフリー対応の玄関やトイレ、浴室があり、一方、既存の住宅設備に、手すりや器具を取り付けることで、バリアフリーの状況に、より近づけた両方を体験することが出来るように作られています。そして、浴室、トイレ、キッチンなどを宿泊して実際に使うことで、自分に合う使い勝手を実感し、住宅環境を整えるための具体的な建築寸法を把握することが

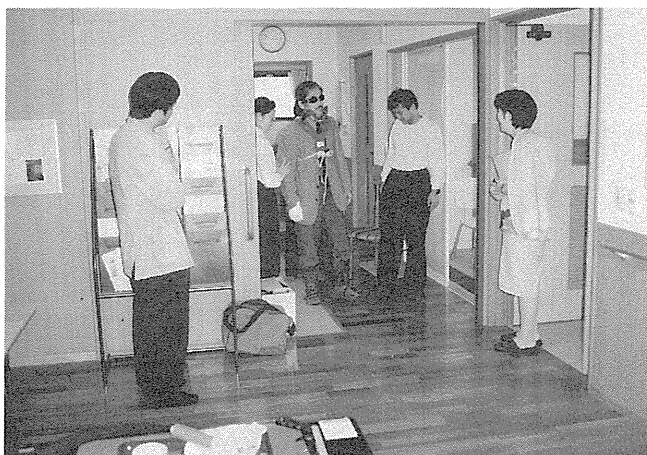
できます。また、ハード面だけにとどまらず、理学療法工、作業療法工、医療ソーシャルワーカーといった専門のスタッフがより实际的、効果的な方法をアドバイスしてくれる施設でもあります。

今回の例会は、この「ユニハウス」において、まず、にしくまもと病院・理学療法工の山田隆治先生より、バリアフリーの観点からみた住環境の改善について、お話をお伺いしました。実際の現場の写真などを交え、高齢化社会の問題が、単にハード面の整備にとどまらず、複雑かつ重大な問題であることを再認識させられた内容でした。続いて、会員の方々に高齢者疑似体験をして頂きました。疑似体験器具にも様々なものがあるようですが、今回は視野を狭く暗くさせるためのゴーグル、首と胸を固定することで前かがみや下を向くという動作をしにくくする器具、足首を固定した上で足の感覚を鈍くする器具、その状態に重りをつけるといった内容を体験して頂きました。

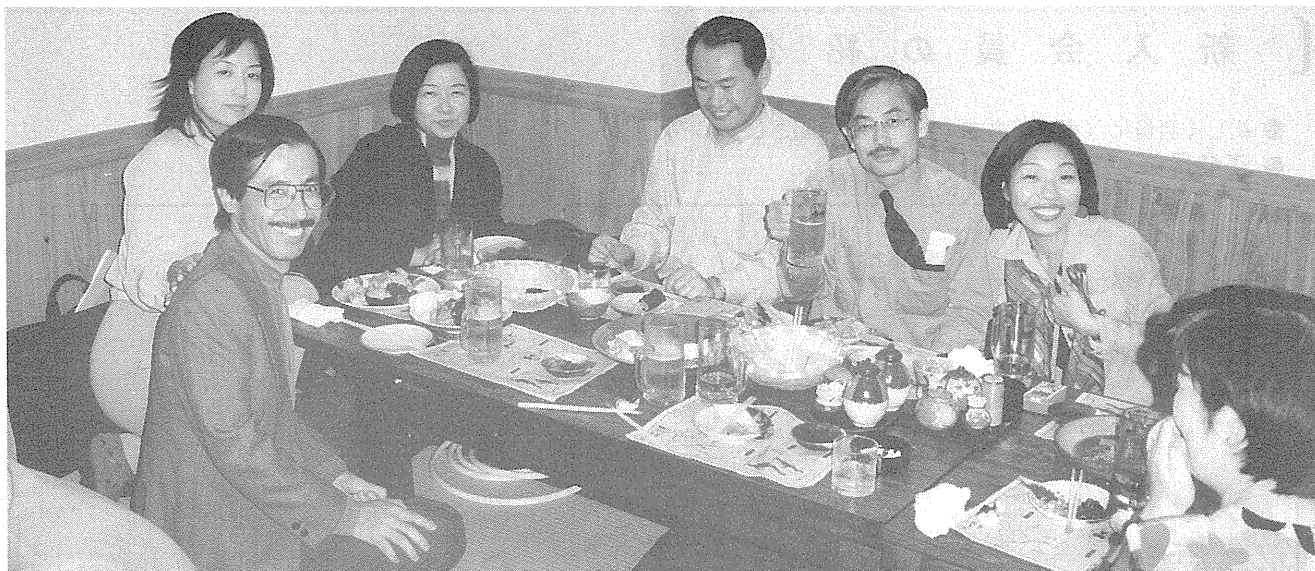
殆どどの会員の方は初体験だったそうで、装着し室内を動かされた後の第一声は、皆さん、「こわい」という言葉でした。器具をつけたまま浴槽に入ってみると、毎日の何気ない動作がいかに困難になるかがよくわかります。畳に座るといふ伝統的な動作には思いのほか、苦痛が伴うことも発見の一つでした。

現実の加齢による身体状況には、個人差があると思いますが、ほんの少しの高さの敷居や階段、こたつ布団といったものが、家庭内事故の原因となるということを実感する機会になったようでした。

持ち回りの例会形式になってから、まだ2回目ということもあり、私たち担当会員にとっては、戸惑うことばかりでしたが、果して満足度の高いものになったのでしょうか。しかし、無事に「例会」を終了することができ、参加



「ユニハウス」にて高齢者疑似体験を受ける参加会員の様子



漁師の手料理「さんたら」にて和気あいあいと例会後の懇親会

して頂いた会員の皆様のご協力に心から感謝いたします。

第1回合同会議に出席して思ったこと

副支部長 石井 信義

去る9月13日、東京・OZONE・セミナールームで上記の会議が開催され、支部長代理として、初めて出席しました。会議の内容は、「9年度の事業計画の遂行」、「創立40周年記念事業」そして「本部・支部の在り方について」等々でした。

各議事について、各委員会から遂行状況が報告され、質疑応答がありました。会議の雰囲気、会議の持ち方、進め方など、いろいろあるな—と思いながら聞き入っていました。会議が進むにつれ、つぎのようなことを考えました。

一つは、情報の流し方、流れ方です。会議の中では、縦の情報は流されているが、横の連絡（各委員会）が不足しているとのことでしたが、私が考えるには、例えばA委員会で決定した内容は、A委員会に属さないすべての会員に流す義務があるということです。要するに、扇型（ピラミッド型）の情報です。そのためには、事務局や広報の働きが重要になると思います。また、流した情報について、会員の意見が必要であれば、会員からの声を聞くことも忘れてはならないでしょう。

つぎは、各委員会の事業の組み立て方ですが、組織や委員会のために、無理して事業を組んでいるように見ら

れました。忙しい委員会、迷っている委員会、立ち止まっている委員会など、組織が時代の流れに合わず陳腐化しているようにも感じられました。

もう一つは、考える視点を、どこにおいて事業を組み立て、組織をつくり、予算計画して協会を運営するかということです。組織のために、協会のために、といういろいろ考え方はありますが、私は700有余名のJID会員のための事業の運営であって欲しいと思います。そのためには、役員という組織と、会員とのきめ細かな情報の交流が重要と考えます。

思いつくまま、感じるままに私見を述べましたが、果たして九州事業支部の場合はどうかと振り返って見ますと、今、九州は「交流」をキーワードとして日田、熊本、北九州、福岡、大川と各地区での「例会」開催を進めており、地区担当者により、知恵を絞った中身のある交流が行われています。これは、会員それぞれがプランナーであり、プロデューサーとしての資質を備えておられ、日常の業務の中で遺憾なく発揮されている成果だといえます。

メニューが沢山あると見栄えはするが、下手をすると味が散漫になりがちです。焦点を絞った事業の組み立て方を考えることが重要だと思っています。デザイナーとしてこれからの社会の変遷に対して、どのように対応して行くべきか模索しながら、各会員がオリジナリティー、各地域のオリジナリティーを表現すると同時に、支部として会員のオリジナリティーを引出すことが課題であり、支部会員が、理解して納得のできる肩の張らないJID九州事業支部であって欲しいと考える今日この頃です。

[新 入 会 員 の 紹 介]

● 新しく会員になられた方です。新しい仲間としてよろしくお願いいいたします。

● 正会員

会員名及び番号		住 所 及 び 電 話
やま もと さ よ こ 山 本 紗 代 子 会員番号 1154 	<勤務先・事務所> <自 宅> <推 薦 者>	スペース Y. D. 大阪府八尾市末広町 1-6-21 〒581 TEL・FAX 0729-91-3070 大阪府八尾市末広町 1-6-21 〒581 TEL・FAX 0729-91-3070 千田 要宗・夏原 晃子

[会 員 の 異 動]

● ご面倒でも、1997～1998版「会員名簿」の該当ページを開けて、ご訂正ください。

● 賛助会員

会 員 名	異 動 事 項	新
(株)ヨコタ (賛助 P213)	移転 担当者	大阪府大阪市北区西天満3-8-28 オクタス西天満4F 〒530 TEL 06-361-0051 FAX 06-361-4545 富樫 忠一
(株)アトリエ・エイティエイト (賛助 P194)	社名	(株)アトリエ G & B

◎会員名簿 1997～1998版をもとにしてあります。

●訂正とお詫び

JID NEWS 1997 8・9 月号〔新入会員の紹介〕でご紹介いたしました政岡 寛之会員に、一部間違いがありました。お詫びし訂正させていただきます。

<勤務先・事務所> (有)マサオカ装飾
正

(株)マサオカ装飾
誤

<自 宅> 高知県須崎市大間本町16-10
正

高知県須崎市大間西町16-10
誤

1997/10～11

社団法人 日本インテリアデザイナー協会月報（1997 年通巻 199 号） 1997 年 11 月 28 日発行

発行所／社団法人 日本インテリアデザイナー協会

発行人／泉 修二

〒160 東京都新宿区西新宿 3-7-1 新宿パークタワー 8F

TEL 03-5322-6560 FAX 03-5322-6559

企画・編集／JID 本部・事務局

印刷所／有限会社 コーエイ企画

速 報

1997年「JID賞」決まる

去る8月25日に締切られた1997年「JID賞」の選考結果は、右記の通りです。

昨年より応募資格を、自薦に限らず他薦も加えましたが、応募総数は、例年より若干多い59点でした。

その内訳は、「インテリアスペース部門」45点、「インテリアプロダクト部門」13点、「インテリア研究・著作・業績部門」1点です。

選考は昨年に準じて、第1次審査（9月8日、10月7日）、第2次審査（10月31日、その間に現場・現物審査を含む）を行い、最終的に初の「大賞」を含む2点が選ばれました。

なお、表彰式は、明年1月下旬の「新春交礼会」（東京）に併せて行います。

（本部事務局）

◎JID賞・大賞

「神戸改革派神学校」

（株）竹中工務店 柏木 浩一（かしわぎ こういち）

◎JID賞・インテリアスペース部門 部門賞

「長居陸上競技場—インテリアの照明計画・デザイン」

（株）木谷デザイン事務所 松本 浩作（まつもと こうさく）

◎JID賞・インテリアプロダクト部門 部門賞

該当者なし

◎JID賞・インテリア研究・著作・業績部門 部門賞

該当者なし

平成9年10月21日

正 会 員 各位

（社）日本インテリアデザイナー協会

選考委員選挙管理委員会

委員長 渡邊輝男

平成10～11年度選考委員選挙開票結果報告

標記について去る10月21日 JID本部事務局にて行ないました。つきましてはその結果をご報告申し上げます。ご協力ありがとうございました。

記

1.出席委員

渡邊輝男（委員長）、高木久美、田口康之、仲 穆子、鈴木美代子、中浜早苗

2.開票状況

有権者 667人

投票数 339票（投票率50.8%）

有効投票 329票 無効投票 10票

（注）無効投票の内容

・定数（10名以内）を超えるもの	4票	・投票用紙以外のもの	1票
・白紙	4票	・その他	1票

3.開票結果（得票順）・印は確定者

・泉 修 二 (77票)	・長 岡 貞 夫 (75票)	・白 石 勝 彦 (70票)	・川 上 信 二 (57票)
・島 崎 信 (55票)	・渡 辺 優 (53票)	・清 水 忠 男 (51票)	・喜 多 俊 之 (49票)
・今 崎 務 (47票)	・森 谷 延 周 (43票)		

次点

・大野美代子 (43票)	・岩 倉 榮 利 (40票)	・光 藤 俊 夫 (38票)	・浅 野 盛 治 (38票)
・中 川 千 早 (32票)	（同得票は役員選挙規定9条2項に準ずる）		

（以 上）

平成9 年10月14日

正 会 員 各 位

(社)日本インテリアデザイナー協会
役員選挙管理委員会 委員長 竹中幸雄

平成10～11年度役員選挙開票結果報告

標記について去る10月14日 JID本部事務局にて行ないました。つきましてはその結果をご報告申し上げます。ご協力ありがとうございました。

記

1.出席委員

竹中幸雄（委員長）、高木久美、田口康之、仲 穆子、鈴木美代子、平瀬明子

2.開票状況

有権者 664人

投票数 341票（投票率51.4%）

有効投票 337票 無効投票 4 票

無効の内容 投票用紙を使用していないもの 1票
白票 3票

内訳： 有効投票 理事 331票、 監事 252票
無効投票 理事 6票、 監事 85票

注）無効の内容 定数以上を記入したもの 理事 2票、 監事 2票
白票 理事 4票、 監事 83票

3.開票結果（得票順）・印は確定者

A-1 理事（関東）

・浅野盛治（120票）	・阪井良種（115票）	・今崎務（103票）
・中川千早（101票）	・中川帛子（87票）	・森谷延周（87票）
・泉修二（81票）	・長岡貞夫（80票）	・吉良ヒロノブ（75票）
・李泰久（68票）		以上定数10名

次点

・福田友美（66票）	・岩倉榮利（64票）	・山本棟子（53票）
・木村戦太郎（45票）	・川上信二（38票）	・白石勝彦（38票）
・大野美代子（35票）	・清水忠男（34票）	・川上玲子（28票）

A-2 理事（中部）

・関里繪子（49票） 以上定数 1名

次点

・安藤清（27票） 宇賀敏夫（22票）

A-3 理事（関西）

・夏原晃子（71票） 山口道夫（41票） 小宮容一（28票）
以上定数 3名

次点

・喜多俊之（25票） 栢原秀榮（24票） 千田要宗（19票）

A-4 理事（九州）

・中川千年（67票） 以上定数 1名

次点

・鐘ヶ江茂則（41票） 坂下昌（7票） 山永耕平（7票）

B-1 監事（関東）

・川上信二（36票） 以上定数 1名

次点

・白石勝彦（27票） 森谷延周（15票） 渡辺優（15票）

B-2 監事（中部、関西、九州）

・金子誠之助（30票） 以上定数 1名

次点

・福岡喜久雄（8票） 栢原秀榮（8票） 宇賀敏夫（8票）
(以上)